

片えくぼ置き去りし人かき氷

鳥取県 馬野慎一郎

【評】 かき氷と一緒に食べたのか、それともすれ違っただけなのか。片えくぼのほほえみが印象的な人だったのだ。甘酸っぱい夏の思い出なのだろう。素朴な「かき氷」が良い。夕刊のインク句はぬ極暑かな

新発田市 加藤じやすみん

【評】 インクが匂う句はよくあるが、「匂はぬ」が意外な把握だ。あまりの暑さに匂いも感じなくなるのかもしれない。説得力がある。

倒立の日焼けの腕の細きこと

近江八幡市 塚本 尚子

【評】 子供なのだろう。軽々と倒立してみせる。日焼けして元氣そうな子だ。けれど全体重が掛かる腕は、こんなにも細い。驚きが伝わる。

蛾蛾蛾蛾深夜のコインランドリー

栃木県 あらゐひとし

嬰兒の瞳に浮かぶ月涼し

埼玉県 竹本 遊児

盆支度蒔蕪玉に父と母

横浜市 缶 清

山寺へ千十五段蟬時雨

青森市 天童 光宏

南風にひらひら猫の髭そよく

東京都 木幡 忠文

むかし悪女日傘くるくるやつてくる

東京都 佐藤 勝美

ジャムを煮る匂ひに目覚め今朝の秋

志木市 谷村 康志

分裂した自己

吉川 宏志 (歌人)

短歌あれこれ

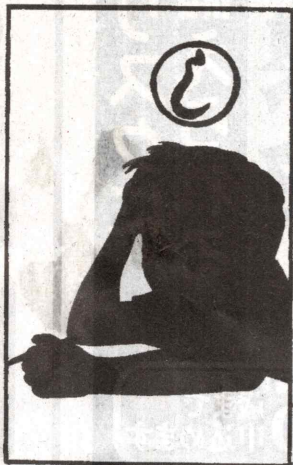
『小池光インタビュー集』

言葉とことばの出会い『本阿弥書店』が刊行された。△雨の中をおみこし来たり四階の窓をひらけばわれは見えてある△という歌では「窓をひらいてわれは見えてある」と普通だが、あえて奇妙な言葉遣いすることによって、分裂した自己を表現している。言葉の細部に徹底的にこだわる歌を小池は作ってきた。

その一方、△母親となりたる志野をみるときに志野かはゆしとせつにおもへり△のように、自分の娘への愛情を率直にさらけだしたような歌もある。

異なる方向性を、自分の内部に共存させることで、揺れ幅の大きな歌の世界を小池は生み出してきた。分裂・矛盾した自己を抱え込み、それを柔軟に表現することが、五十年以上の長い文学活動を支えたのだ。この本を読むと、自己を無理に統一しないことの大切さが見えてくる。

聞き手の寺井龍哉が、自然に、巧みに話を引き出している。



題字デザイン・イラスト

福田美蘭